

interview インタビュー

春3月30日に未来のタカラジェンヌ93期生50人の合格発表があった。相変わらずの狭き門，“清く正しく美しく”の道のりは厳しい。宝塚歌劇団入団3年目で月組娘役トップスターに大抜擢，2004年10月には惜しまれながら退団，2005年1月には新たに女優としてデビューした映美くららさんに宝塚時代とこれからの抱負などをインタビューした。
(聞き手：小島愛子)

プロフィール えみ・くらら

1979年6月熊本県生まれ。1999年4月宝塚歌劇団入団。3年目には月組娘役トップスターに大抜擢というスピード。2004年10月にはトップ生活3年目，入団わずか6年目にして惜しまれながら退団。2005年1月にはテレビドラマ「ナニワ金融道」でSMAPの中居正広氏らと共演し女優デビュー。

女優 映美くららさん

—昨年，宝塚歌劇団を退団され，現在は女優として活躍されていますが，そもそも宝塚に入ろうと思ったのはどのようなきっかけからですか。

もともとバレエを習っていたこともあって，舞台やお芝居を観たりするのは好きでした。口には出しませんでした，心の中では「女優さんっていいなあ」と思っていたんです。そんなときに宝塚を観て，ただただ圧倒されたというか，迫力があって夢の世界で，パワー全開の舞台に純粋に感動して，私もあの舞台に立ちたいと思ったのがきっかけです。

—宝塚が自分に与えた影響はありますか。

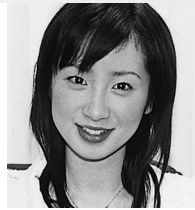
私は子供の頃から目標に向けてコツコツ努力する性格で，表立って「私がやる」というタイプではありませんでした。けれども，宝塚を見て初めて，自分の意

思でこの道に進みたいという夢を持ったんです。高校に通いながら一生懸命レッスンを受けたりなど，いま振り返ると「よくやったな」と思いますけれど（笑）。当時はあまり歌や踊りが上手ではなかったのにどうして宝塚の試験に受かったのだろうと考えてみると，「宝塚に入りたい」という気持ちだけは誰にも負けない自信があって，その思いが試験官の方に伝わったのかなと思います。

入学後は大変なこともありましたが，好きで入ったところですし，誰もが通る道だと思えば頑張ることができました。また，年上の人と接する機会が多かったので社会的になりましたね。根性もつきましたし（笑）。

—女優として新たに出発したお気持ちは？

何か新しいことを始めるときに，これからどうなる



宝塚は「非日常」ですが、テレビドラマは普段の生活がお芝居につながっていく。映画を見たり、人と会話をしたり：「日常生活の中で感じる心」を大切にしています。

のだろうという不安は誰でも感じるでしょうし、もちろん私自身も感じています。けれども、この道で行こうと決めたのは自分ですから、やるしかないですし、一回一回与えられたものをきちんとこなすことが次につながると思っています。

—女優になられてから、どのようなお仕事をされていますか。

お正月に「ナニワ金融道」というドラマに出演させていただきました。初めてのCM撮りもしましたし、また現段階ではまだ詳しく決まっていないのですが、5月から始まるNHKのドラマにも出演させていただくことになっています。

—「ナニワ金融道」に出演されたときに苦労されたことはありましたか。

テレビと舞台のお芝居の違いが難しかったです。6年間ずっと舞台のお仕事をしていたのでテレビカメラに慣れていなくて、どうしても大芝居だったり視線を振ったりしてしまいます。目の前にあるカメラを見ずにお芝居をすることに慣れてくるとはと思っています。また、舞台だと常に誰かが自分のことを見て下さっていますが、テレビの場合は映ったときにこそ頑張らなくてはならないという違いがあります。その辺りのポイントを早くつかみたいと思っています。

—テレビドラマのための演技のレッスンはあるのですか。

宝塚時代はお稽古がりましたが、今は個人として仕事をしているので、特別なレッスンというものはしていません。ただ、宝塚はある意味「夢」というか「非日常」ですけれど、テレビのお仕事の場合は普段の生活がお芝居につながっていくので、“当たり前前の生活”というものを意識するようになりました。今は、自分で映画を見て勉強したり、人と会話をしていく中で何かを感じ取ったりしながら、テレビのお仕事に必要な「日常生活の中で感じる心」を大切にしよう心がけています。

—宝塚時代の生活と現在の生活を比べていかがですか。

宝塚時代はあっという間に走り抜けたという感じで、密度が濃かったですね。とても恵まれていて、充実していました。ただ、自分自身を解放したり、自分に対して優しくなれる時間が少なかったということに、後から気が付きました。退団して自分を見直す時間ができたことは、とても貴重な体験だったと思っています。昔の自分のがむしゃら過ぎたかなと思うこともありましたが、今となっては、あの時の私はあれで良かったのではないかと考えています。

—唐突な質問ですが、「弁護士」に対するイメージは？

自分達とは世界が違うような感じがしますね（笑）。頭が良くてカッコよくて。でも、直接お話ししてみると楽しく過ごせますね。弁護士さんとして意識するよりも、1人の人間の方として頼っていいんだと感じました。天海祐希さんが主演されている「離婚弁護士」というドラマが好きで、あのようによく仕事をされている弁護士さんがいたらいいと思います。

—最後に、これからどのような女優さんになりたいですか。

いつも思うことですが、人の心に残るお芝居をしていきたいと思っています。その気持ちはずっと変わっていません。そのために、普段の生活をきちんと送り、その中で感受性を強めていきたいと思っています。

（構成：小島 愛子）